

今月は、ことに多様で思索的な作品が多かったように感じました。皆さん、この欄を通じて書きながら考えておられるのでしょうか。

僕の心の静寂はいつも
耐え難い騒音とともにある

作者 宇井 麻千

大阪府 43 歳

——静寂と騒音という正反対の現象が、実はぴったりと張り合わされた分ちがたい裏表であるという発見。

鳥籠の中の静寂原爆忌

作者 さいう

愛知県 15 歳

——私たち日本人の置かれた現実を思わされる。籠の中であろうと外であろうとそれは変わらない。

ジャンジャンと
鐘を鳴らして号外が
配られたらしい
敗戦の日

作者 儀間ゆみ

沖縄県 49 歳

——すべてが崩壊したような「敗戦」という現実（あるいはフィクション）の中でも予測して刷られていた「号外」というしたたかなフィクション（あるいは現実）。

父が使っていた地図帳の
「琉球」と「コザ」の文字に
驚いた記憶

作者 加藤 美紀

愛知県 41 歳

——地図は地名の中に「歴史」という時間と「位置」という空間を抱え持つ。

手拍子の花開くよに
崩れゆく

祖母の背何度、なんどさすれる

作者 さいう

愛知県 15歳

——手拍子、花、開くというポジティブな言葉で表現される「崩れゆく」祖母の背中。作者の独特の感性が感じられます。

類語辞典

言葉はみんな恥ずかしそう

作者 合川秋穂

京都府 24歳

——どうがんばっても類似は類似であって、そのものではない。奮闘の末、並んでいる言葉は皆恥じている。言葉の宿命と自在をうまく表現しました。

うどん屋の跡にうどん屋

まひるまの人の少ない

バスにゆられて

作者 郡司和斗

茨城県 22歳

——何気ない風景が言葉のリズムに乗ると際立ってくる不思議。

だらりと垂れたバナナの皮

本当はね

カーテンになりたかったの

少しはにかむ

作者 いけす

東京都 29歳

——なれそうもないのに募る思いは人生にいっぱい。それを垣間見せるのは言葉の世界。素敵な感性です。

競い合う事を私がやめた時

はじめて私は言葉を

超える

作者 宇井 麻千

大阪府 43歳

——「意味」を伝えたい、「意志」を伝えたいともがくのを止めたとき、言葉は素顔を見せてくれるのかも。二行の空きはその困難な距離の表現でしょう。